

## 曖昧さを生きる学び

十文字学園女子大学 教育人文学部 教授 名達英詔



### 1. 私たちが生きる世界の曖昧さ

私たちは日々の生活の中で様々なものごとに出会います。と言いますか、意識が働くところにものごとが立ち現れるといった方が適切かもしれませんが、そうしたイメージが捉えられる範囲や精度はいかかなものでしょうか。おそらくそれは限られており、且つ曖昧さをもとまうのではないのでしょうか。例えば右の画像を見てください。全体の詳細を見定めようと試みると常に視点が彷徨っていることに気づくかもしれません。あるいは一点を詳細に見ようとすると周囲は途端にぼやけ、なんとなく感じるといった感覚になるかもしれません。次に、この写真から受ける印象についてはいかがでしょう。ある人は明るい木漏れ日が射す森の入り口にワクワクしたり、穏やかな気分になったりするかもしれません。しかし、別の人は、ちょっと怖い気分や不安な気持ちを抱くかもしれません。



生きて働く私たちの身体は、このように常に動きを伴いながら、意識の及ぶところをイメージ化したり、そこから感情や意味を生成したりしているようです。そして、一人ひとりがそのものごとに接した時に受ける感覚の質も違い、さらに、経験によって印象などにも違いが生まれるでしょうから、やはり、皆それぞれ曖昧な関係性の中で現れる個別の世界に生きていると言えそうです。

本稿では、そうした世界の中で、造形表現がいかに学びとして働くかについて少々見ていきたいと思います。

## 2. 曖昧さを活かす生き方

昨今、先行き不透明な時代ということを目にしますが、さて、先行き不透明は今に始まったことでしょうか。考えてみると、私たち人間が登場する以前から世界のありようは先行き不透明だったのではないのでしょうか。そもそも、「先行き」という見方も、人間が登場して時間という概念が生まれたことにより付与されたもので、元々は都度都度・・・つまり常に不透明が当たり前であったのかもしれませんが。



いずれにしても、そのように予想できないこと、未知なことと出会う日常が必然で、且つ曖昧さを抱えながら生きてきた人間がいかにもその生活をながらえるかは、他の生き物同様、大きな課題だったでしょう。そうした中、人間が英知を用いたり工作したりすることをその戦略としたことは言うまでもなさそうです。また、それに加えて遊ぶことや象徴すること、苦悩することといった点までもが登場したことは実に興味深いと思います。なぜなら英知を働かせ、偶然出会ったことの蓄積から、その情報を整理、分析し、伝承するといったことは、曖昧さを排除し、安全や安心をもとにした生活を営む上では直接貢献するでしょうし、また、そうした知見をもとに、有効な工作物をつくり、用いることも合理的でしょう。さらにそこに至る道筋・方法を学習することも実利的と言えそうです。

これに対し、遊ぶことは生活に役立つことを直接には生まないように見えます。また、何かを象徴することや、ましてや苦悩することなど、なおのこと無駄かもしれません。では、なぜ人間は、このようなことと共にあるのでしょうか。そこには、曖昧さを避けたり排除したりしながら安全を手に入れるということだけにとどまらない、不透明な世界の中で出会う曖昧さとの共存を超えて、より積極的な共生へと向かった人間のしたたかさがあるので



はないのでしょうか。それは、例えば遊びの中で実利を求めずに挑戦したり面白がったりしながら通常の生活ではなかなか出会うことのできない偶然や曖昧さをあえて生み経験することで、人間の英知や工作

を加速させたかもしれません。また、ものごとを象徴的に捉えることで、その固有のイメージを偶然や曖昧とともに想像できる領域に解き放ち、時間や空間、意味のやりとりなどを柔軟にしたかもしれません。そしてそこには、白黒つかない、はかり知れないものごとの居場所をつくったりすることもあったのではないのでしょうか。さらに、苦悩することを引き受けることで、悲しみや怒り、哀れみや自己犠牲といった生きるためには本来ネガティブと捉えられそうな感情を人間に必要なものとして価値付け、有意なものとしていったかもしれません。



### 3. コミュニケーションのもと

さて、私たちが社会性を発揮することで主として存えてきたことは、おそらくご了解いただけることと思います。それは、他者を退け、自分だけが生き伸びることを超え、より確実に安定と安心に裏打ちされた生活を追求する中で導き出された答えかもしれません。そして、そうした社会性を発揮するために他者の感じていることや考えていること、行動などを把握し、互恵的に応じていくコミュニケーションを駆使することは欠かすことができなかつたのではないのでしょうか。では、こうした求めに応じるために、何が役立つでしょう。それは実際の協働的経験はもちろん、言葉や音、身振りや手振り、視覚的な造形などをもとに感覚やイメージを伝え合うといったことが考えられそうです。と言いつつ、これらがその役目を果たすためには、そこに感覚や感情、意味や価値の理解や共有が必要となるでしょう。そこでは、例えば「この木の実は薬として役立つ」といった知識が経験的にも揺るがないものとして共有されるのとは別に、人の感覚や感情といったように、曖昧故に全く揺るぎなく共感、理解することが難しい共有もありそうです。そこで私たちは何をするかと言えば、自他の内面に意識を向け、そのありようを想像するわけです。そして、想像して導き出した対応策を、「こんな感じかな・・・」と思いつつ試し、繰り返し、反応を見て、



より良好な共有に近づけるよう共感を試み、ズレを修正していくのではないかと思います。このように自己も含むお互いの内面を手探りしながら関係性を紡いでいくコミュニケーションにおいては、ネガティブな感情の価値付けもその理解のためには有効でしょうし、利他的な行為などは、互恵的な社会に貢献する高次の美意識の現れとして捉えられるかもしれません。

自己の内面に想像の世界を宿したことは、自他の意識を内的に仮設し、曖昧さの中でその吟味を行うという、人間にとって必須の営みが得られたということで画期的なことだったのではないのでしょうか。そして、偶然や曖昧に豊かに親しみ、その妙味を知り、活かしていく遊びが登場したとすれば、それも必然であったかもしれません。

#### 4. 未知と出会い、曖昧から学ぶ

これまで見てきたように、曖昧さに親しみ、想像し、挑戦することがより人間らしく生きる上で欠かせないこととしたとき、英知を働かせて整理、分析、伝承する学びを尊ぶことに加えて、遊びと想像、ネガティブな感情の価値化といった特性が含まれる学びも同様に経験していくことは大変重要なことではないでしょうか。そして、やや強引ですが、そうした学びを経験するために造形表現はおよそふさわしい方途のではないかと考えます。なぜなら、そこには、未知なものごとや曖昧さとの出会いが学習環境として用意されており、その上で、用具・材料、空間や時間などとの相互作用も含めた自他の対話、コミュニケーションが発生し、共感・共助・共働・共創といった様々な関係性が切り結ばれること。そうした中で想像することや感情をやり取りすることがなされ、挑戦的・実験的な探索や多様な価値が拡散的に生まれることが承認、奨励されるといった美点が備わっているからです。

この世界の曖昧さが、私たちに未知との出会いをもたらし、問いをもって探求したり、想像したりすることを促しながら人間らしい生き方へと導いてくれているとしたとき、子どもたちがその曖昧さを喜びながら、次の一手を打っていく、そのみずみずしい挑戦に造形表現が貢献できることを切に願うばかりです。

